宣伝戰線の統一へ

桂、楓共同編集に成功

三川支部緑ケ丘の桂地域分会（分会長・遠藤長市氏）と楓地域分会（分会長・松村盛正氏）では分会結成以来六年、隣接する地域分会との共同デスクを企画、九月中旬これまでの念願がかなつて、かつら（十号）、うたごえ（楓機関紙十四号）が、共同編集で出版することができた。

これは地域機関紙としてははじめての共同編集で、このような企画が次々と実施されることを分会員はもちろん執行部でも強く望んでいる。

松村楓分会挨拶

緑ケ丘の地域分会を分析した場合、連合会はあるものの、未だ各町内（分会）の行動のみに終始され、他の分会がどのように考え、どのように働いているかを日常下部に浸透する機会が極めて少いのではないでしようか幸い機関紙編集の方々のご尽力により、隣り分会の桂町と合同発行の運びになつたことは、誠に意義あるものと思い喜びに堪えません。

遠藤桂地域分会長挨拶

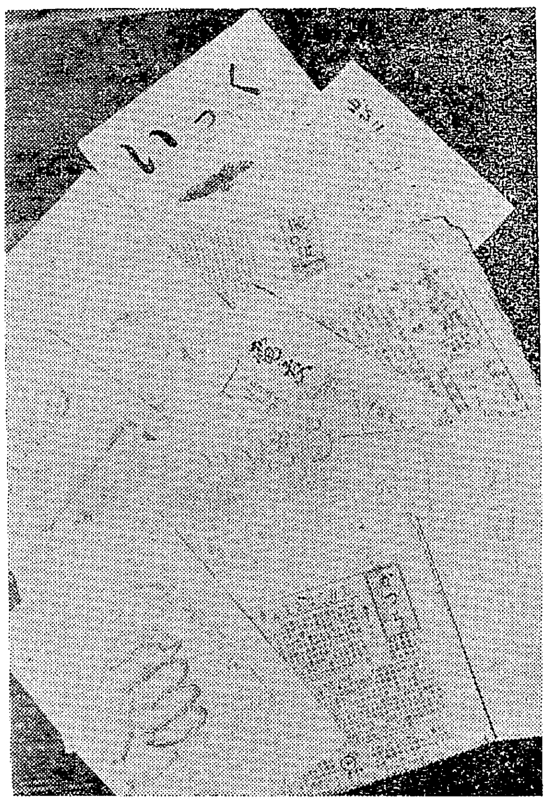
みんなで書いた機関紙は歴史に残り、またより多くの人に自分の考えを伝えます。共同機関紙は一つの地域より他の地域へと広がりお互の知識を広めます。隣接地域分会相互がより発展するため、みんなで共同機関紙をますます育成しましよう。みんなの社会をつくるため!!

池田桂町文化部長談

今年は緑ケ丘一本の共同編集をしたいというのが念願です。その第一歩として「かつら」、「うたごえ」の共同編集をしました。緑ケ丘の地域で機関紙の出ていない地域があと二、三地区ありますが、そうした所にもこの共同編集号を贈呈して、機関紙発行の刺激にしたい。

寺尾楓編集部長談

こんどの共同編集で楓分会の方は、記事が多くてうれしい悲鳴をあげました。のらなかつた方は次回にのせ、こんどもみなさんの協力で、親しまれる機関紙にしたいと思います。



コンクールは十二月初旬

「かつら」「うたごえ」の共同編集をポイントに、今後の地域、職域機関紙のあり方と、三鉱労組の「機関紙コンクール」について、本部・平島編集部長に方針を聞いてみた。

本年度の編集部の活動方針は、より多くの職場、地域に機関紙を誕生させ、これを育成していくことを指標にしました。昨年より、職場で三分会地域で六分会の新しい機関紙が誕生しました。その中で「かつら」「うたごえ」の二つの機関紙が共同編集し出版する段階に来たことは、予想以上の成果だと思います。敵のマス・コミに対処するためにはなんといつても、われわれ側の宣伝戦の統一強化が必要であると思います。

こんどの両地域の機関紙共同編集を契機に、全緑ケ丘地域の共同編集を成功させるよう、本部編集部としても手助けをしたいと思つています。

今後の方針として（四山）（勝立）（大谷・万田）（勝立）（銀水・七夕・長溝）（三池郡内の集団社宅）をブロックに、第一段階の共同編集を試みるよう地域分会の方に要請したいと思つています。

方法としては「みいけ」第四面を共同編集に当てて、批判を仰ぐ予定で、これが成功すれば外来にもつていきたいと思つています。

機関紙コンクールは新年文芸募集とにらみあわせ、十二月初旬を締切りに十・十一月両月発行された機関紙を審査の対象にする予定で、詳細は「みいけ」次号で発表する予定です。

なお、より多くの機関紙が誕生するよう、十月はガリ版、編集講座を共同編集地域ブロックごとに巡回する予定で、希望地域は申し出ることを希みます。

映画

菅生事件の「囮」撮影開始

独立映画作品「囮（おとり）」は山本薩夫監督で十五日調布スタジオでクランク・インした。「囮」は大分県菅生村の交番爆破事件をモデルにしたもので、事件のカギを握る元大分県警巡査部長戸高公徳はこの十七日爆発物取締罰則違反の疑いで起訴されるなど、事件は全く奇怪なもの。現実に係争中の事件の映画化としては今井正監督「真昼の暗黒」につづくもので、それだけ映画の扱いには慎重を期している。

問題の主人公戸高公徳または市木春秋（映画では戸万高徳）は南原伸二で、「異母兄弟」につづいて二本目の独立映画出演である。共産党員玉木に新人矢野宣（俳優座）このほか三島雅夫、千田是也、多々良純、永田靖、東野英治郎、薄田研二、小沢栄、松本克平、東山千栄子、岸輝子、など俳優座総出演である。

映画では戸方は初めから警察側のスパイとして登場、彼が菅生村の日共工作隊に潜入して党員を煽動し交番を爆破させ自分は逃げる。そして学生に化けかくれているところを新聞記者に踏みこまれて証人として出廷する――となつている。初日のセツトは首尾よく菅生村の細胞にもぐりこんだ戸高が、党員たちの動静を警察幹部に報告にくるところ、監督の山本薩夫は「現代のドレフユス事件ともいうべきこの事件を通じて、国家権力がいかにして真実を曲げようとしているかを描きたい」と抱負を語つている。

脚本は「米」の八木保太郎、完成は十一月上旬の予定。

今週の映画

★セントラル
（2―8）連発銃は知つている、旅券八二四一の女

☆太陽館
（2―8）大学の侍たち（C・S）、ほか一本

★東映
（30―7）ゆうれい船（C・S）満月乙女笠

☆銀星
（2―15）道、地獄の分れ道

★大牟田名画座
（2―8）三人のあらくれ者、裸の天使（共にV・V）

☆グランド
（2―8）九時間の恐怖、真昼の対決（V・V）

★荒尾名画座
（2―8）三人のあらくれ者（V・V）恋とタカ（CS）

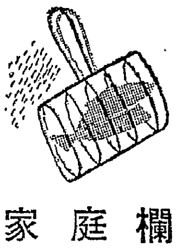
☆中央映劇
（2―5）彼等は馬で西へ行く、黄金の賞金

★荒尾東映
（2―8）ゆうれい船（前C・S）満月乙女笠

☆文化
（2―8）白人部隊殲滅、友情ある説得

★宝星
（2―5）米、母と子

家庭欄



衣類の手いれと保存法

被服の手入れと保存は、被服の管理をうけもつ主婦のいちばん大切なことがら、その上手、下手はすぐに被服を永もちさせるかどうかにえいきようし、被服費にも関係します。

九月末から十月にかけては空気も乾燥し、虫ぼしに絶好の季節ですカラツと晴れた日に夏・冬着の入れかえをし、出した冬着は順々に晴天の日に風をとおしておきたいものです。

洋服類の手入れ

毎日の手入れのほかに、一週間に一度は念入りな手入れをすること丈夫な色のものであれば洋服掛けにつるし、二〇分ぐらい陽にあて、服たたき棒で全体をたたき、ほこりをだしてブラシで払いおとします。つぎにえりやポケツトロ、そで口をベンジンでふき、両面から乾いたタオルをはさんで汚れをうつし取ります。つぎに全体の汚れは二〇倍くらいに薄めたアンモニア液を洗面器につくり、布にふくませてしぼり、洋服全体の汚れをさつさとふきとります。汚れがすつかりとれたら早くアイロンをかけて蒸発させます。

虫干し

虫は汚れていたり、湿気のあるところを好むので、衣類はいつも手入れをし清潔にしてしまうことが大切。虫は成虫となつて卵を産むとき、幼虫で毛織物を直接食害する時期に特に注意しなくてはなりません。この期間は虫によつて違いますが、大体四月から十月までです。虫干しは土用干ともいつて梅雨明けの土用にしましたが、毛織物の場合はかえつて虫をよぶおそれがあります。時期は晴天つづきの十月か、害虫の飛びまわらない十二月から二月にかけてするのがいいでしよう。

保存

▽季節のものをしまつておくのは桐は湿気が多いと自然にぼうちようして外気の浸入を防ぎ、また内部の湿気を吸収しますから中の衣類はいつも乾燥させておけます。引出しの中にはナフタリン、ホドジンなど入れておきます。

▽洋服類は洋服だんすが便利です普通の押入れを利用して中のたなをのぞき、上に丸い横木をわたしてつるしてもよいでしよう。できれば内部をトタン張りにすればなおよく、湿気や虫も十分防げます そのほか茶箱、トタン箱は長期間保存にはいちばん完全です。

囲碁教室 (26)

カケとヒラキ 2

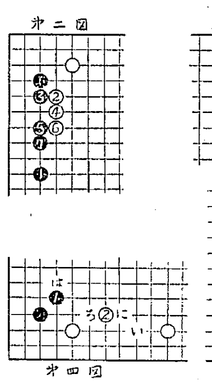
第一図 小目と目外しに対時している場合、位の高い白からは五間までもヒラく事が出来ると述べましたが、位の低い黒からのヒラキは当然狭くなります。普通黒―1と2間にヒラいて次に白の挾撃をねらいます。では低い石から広くヒラくと何故いけないのでしようか。

第二図 今仮りに黒1と星下までヒライたとすると、白はすかさず2以下図の手順によつてカケてきます。その結果は黒は第三線の低い位置に石が辺し、黒1の石は全く働きの乏しい石になつています のびのびとした白石と比較してみて下さい。

第三図 第二図のカケは「い」と広くヒラいているような場合はその価値は益々大きくなつてきます。このような場合は黒はヒラキに先立つて1とコスまなければなりません。白が「ろ」とせまくヒラいているような場合はさほどではないのですが、図の如く広くヒラいている時はこのコスミはほとんど絶対的になつてきます。

第四図 黒1とコスムと今度は逆に黒の位が高くなり、黒から「い」と打込まれるのがきびしく、又「ろ」とカケられる手段等があつて、白2のかこいが必要となつてきます。なお黒1のコスミにかえて「は」と打つて石を上方に働かせる事があります。それだけに隅は手薄で、白の守りも「に」と変ります。

橋口敬一初段 撰



長屋太平記 中村かめお

短篇小説 三度目の真実

長谷川四郎

一軒の家に主婦が二人いた。よくあることだが、そこには二家族住んでいたからである。で、あくる朝、第一の主婦が起床して、いつものようにアマ戸をあけ、いつものように牛乳をとりにいつてみると、いつもとちがい、そこには牛乳がなかつた。といつてそれは自分の牛乳入れにだけなくて、もう一つの方にはちやんと入つていたのである。配達夫が忘れたのかも知れない、と彼女は考えながら、道路へ出てみると、からつぽの牛乳ビンが一つ溝の中にころがつていた。してみると、誰かが先まわりして飲んでしまつたのにちがいなかつた。第一の主婦はもう一つの牛乳入れから牛乳をとつてきて知らん顔していることだつてできただろう。しかしそういうことはしなかつた。彼女は飲みすてられた空の牛乳ビンを拾つてきたのである。

もともとたつた二本の牛乳ビンだから一つの牛乳入れでよかつたはずである。また先にとりにいつたものが二本の牛乳をもつてきてもよかつたはずである。しかし第二の主婦がすべてをべつべつにすることを主張したのである。第一の主婦はそれに敢て反対しなかつただけだが、しかしこのような「事件」が起きてみると、それは賢明なことに思われた。盗み心をおこした人にはどつちの牛乳だろうと同じことだつたろうが、とにかく結果においては、自分のが飲まれたことがはつきりしていたからである。もし牛乳が一つだつたならどちらの分がとられたということは、神様だつて判定ができなかつたろう。それに、こんな事件は一回きりだろうと、第一の主婦はひとりぎめしていた。だから黙つていてもよいことであつたが、二人の主婦が台所でそれぞれの家族の食器を洗つていたとき、第一の主婦が自然と口をすべらした。

「うちの牛乳、きよう無かつたわ盗まれたらしいの」

「まあ、ひどいわね、きつとあの新聞配達の小僧がとつたんだわ」と第二の主婦がいつた。

「うちだつたら、つかまえて、ひつぱたいてやる」

「いいわよ、一本くらい」と第一の主婦は第二の主婦の権幕にまきこまれ、それまで新聞配達のことなど念頭になかつたのに拘らず、半分ばかりそんな気持になつて、かばう気持から、そういつた。災害は忘れたころにやつている。同じことが二度起きた。第二の主婦は、ひとごとながらますますフンガイした。第一の主婦とその家族は朝早くアマ戸からのぞき、現行犯をつかまえようとしたが、いざとなるとみんな朝寝坊をした。そしてある日曜日、おそく起きた第一の主婦がまたまた第二の主婦と一しよになつて牛乳をとりにいつてみると、こんどはまざまざと第二の主婦の牛乳がなくなつていたのである。そこへさらにおそくなつた新聞配達の少年がやつてきて、新聞を手渡していつた。みずからかれは不在証明をしたわけである。

「牛乳入れを一つにしましょう」と第二の主婦が提案した。

「そうね、そうしてそれにカギをかけるようにしたら」

こうして牛乳はとられなくなつたこれはそれでいい。そして新聞配達にもし罪があるとすれば、善良なる二人の主婦に疑心をおこさせたという罪である。が、ほんとうの罪は二人の主婦にあるのだ。なぜなら、諺にもあるように〃疑う者に罪あれ〃だからである。